

2015 年 8 月 9 日（日）

美術館鑑賞

担任名：宮田雅子

東京都美術館「伝説の洋画家たち～二科 100 年展～」

100 年もの長い間開催され続けてきた二科展では、時代毎に展示が区切られていて、絵の風景や描き方などから歴史を感じることができた。絵を見ながら気になったのは、作家がなぜこの絵を描いたのか、なにを思いながら描いたのか、ということだった。キャプションを読みながら考えながら見て行くとあっというまに時間がたったように思う。

特に印象に残っているのは佐伯祐三の「新聞屋」である。以前ブリヂストン美術館に行かせていただいた時に見た「ガラージュ」を思い出した。その時にも感じたことだが、絵を見てまず目の中に飛び込んできたのは文字である。今まで見てきたもので、絵の中に字が使われ、そしてこれほど文字にインパクトを感じるものはなかったように思う。描かれているのが昼なのか夕方なのかはわからないが、乱雑に置かれている新聞や雑誌、灰色の壁に真っ暗な室内、人物も描かれていない様子は、街の片隅にあるような淋しさと少しの不気味さを感じる。

しかしその中でも新聞や雑誌に描かれている文字が力強く勢いよく見えるのはなぜなのか。キャプションを読むと、佐伯祐三はこの絵を描いた翌年に亡くなり、遺作として死後二科展で紹介されたそうだ。病気を抱えながらも描いたこの作品には、佐伯祐三の寂しさと、それでも絵を描くことに対する想いが力強く文字として表れているような気がした。想像でしかないが、なぜこのような表現したのか、どうしてこの色を使ったのかなど、考えながら見ることは、美術館に行く機会の少ない私にとって新鮮でありおもしろかった。またキャプションを読むことでより楽しめたように思う。